遠いけど近い「スリランカ」の光（魅力）と影（課題）

三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング
国際営業本部　部長
君島　慎一

はじめに

筆者は、2014 年から 2017 年まで、三菱 UFJ 銀行のチェナイ支店（インド）に勤務し、その間、対岸にあるスリランカでのビジネスに携わりました。邦銀初の拠点をスリランカのコロンボに新設し、現地の当局とともに、投資先としてのスリランカを日本の皆さまにご紹介することが役回りの一つでした。一度でも訪れてみるとその良さが分かるスリランカなのですが、日本の皆さまの意識に上ることは少なく、進出先として検討する対象にすら入っていないケースがほとんどどかと思います。

スリランカには、投資先として、あるいは貿易相手先として、非常に大きな魅力・ポテンシャルがあります。一方、光強ければ影も色濃いものであり、課題もまた大きいものがあります。今回は、まずは、皆さまにスリランカにご興味・ご関心を持っていただけるよう、なるべく肩が凝らないようなお話を中心にスリランカの光と影をご紹介したいと思います。

1. 何が得意で、何が魅力？

（1）海上交通の要衝／地政学上の重要地域

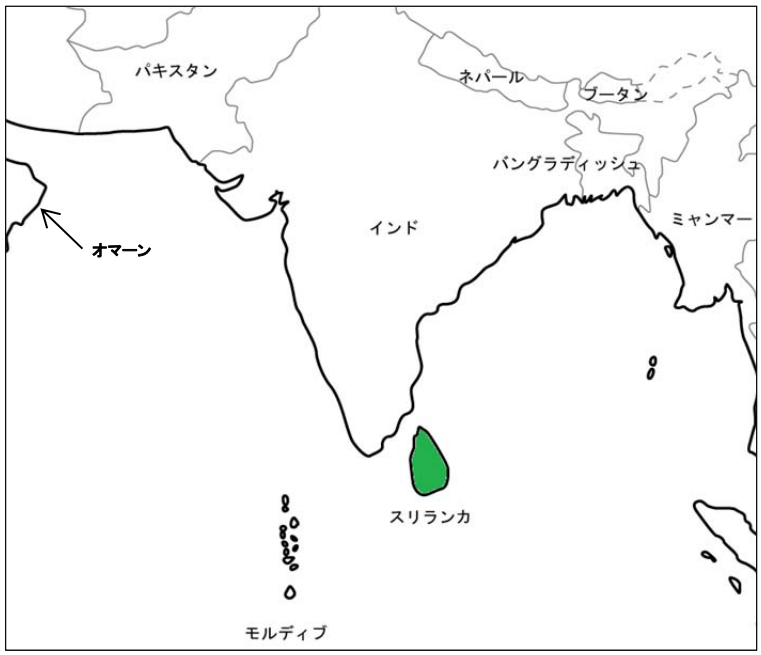
読者の皆さまにとっては、「スリランカ」というよりも、以前の国名の「セイロン」の方が馴染みがあるかもしれません。「セイロン」と聞いて連想されるのは、紅茶の「セイロン・ティー」や、あるいは、筆者と同年代の 50 歳台の方であれば、朝のニュース番組で「グッドモーニング！」と爽やかにサラリーマンに英語で話しかける「ウィッキーさん」でしょうか。お詳しい方なら「内戦」「タミル・タイガー」の印象が強いかもしれません。確かに紅茶はおいしいですが（従来、筆者はあまり紅茶を飲みませんでしたが、現地でおいしい紅茶にはまってしまいました）、昨今は、そういった物産品ばかりでなく、地政学的な重要性からも大変注目を集めています。

スリランカは、現地語で「光り輝く島」を意味し、日本の北海道くらいの大きさの島国です。「環インド洋地域」の中央にあり、世界で最も通行量が多い海上輸送ルートと言われる欧州－アジア航路の中央に位置しています。東南アジアで作った製品を欧州や中東に輸出する際には必ず通る航路であり、また、中東の石油が日本を含むアジアに輸出される際にも利用される航路でもあります。特に、中国にとっては、「一帯一路」の推進にとって極めて重要な地域であり、かつ、自国に隣接する大国インドへのいわゆる「真珠の首飾り」戦略の重要な地域と言え

ます。日本にとっても、この航路を押さえられてしまうことは、大事な資源の通り道を遮断されることに繋がります。各国の思惑が集まる地政学上の重要な地域と言えます。

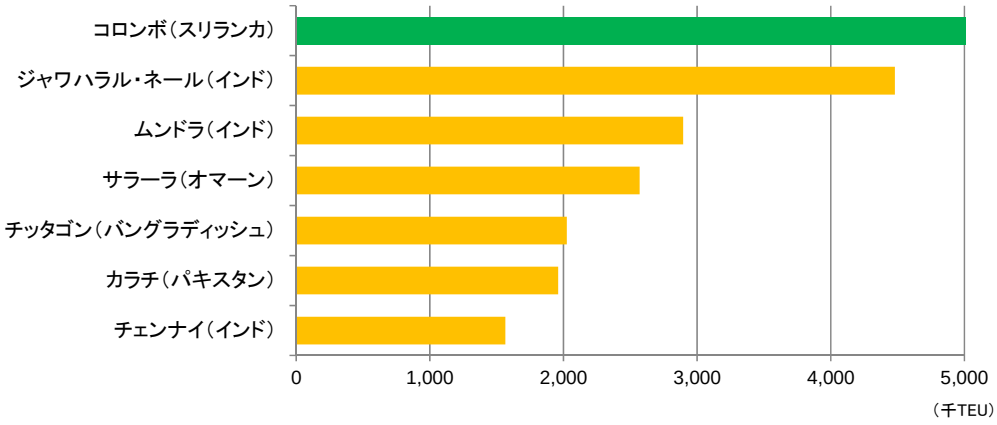
また、スリランカは、天然の良港も有しており、物流ハブとしての機能も期待されています。インドの港は水深が浅いところが多いため、インド向けの貨物を積んだ大型コンテナ船はコロンボ港に一旦入港し、貨物をフィーダー船と言われる小型船に積み替えてインド各地に運ばれています。また、インド南部に大規模な工場を持つ自動車会社は、インドで製造したクルマを一旦スリランカに運び、そこから欧州便もしくはアジア便に積み替えて輸出しています。

図表 1　スリランカ



日系物流企業もこういった海上交通の重要性に着目し、SG ホールディングスグループは、2014 年 5 月 9 日のニュースリリースにてスリランカの物流会社「エクスポランカ社」の経営権を取得したと発表しました。同社の発表によれば「アジアからさらに西へむけたグローバル・ネットワーク確立を視野に入れた事業展開―ルックウェスト―を目指しており」「インド洋経済圏を中心とした地域カバレッジ、高い専門性と知見を有する同社（エキスポランカ社：筆者注）への出資は、このような SG ホールディングスグループにとり理想的なパートナーと考えております」としています。SG ホールディングス以外にも、日本の主要な物流会社はスリランカに注目し、拠点を構えています。今後、インドの経済発展、更には、中東・アフリカ市場の発展と同地域への物流を考えると、アジアと欧州・中東・アフリカを結ぶスリランカの重要性はますます高まるものと思います。

図表 2　インド洋の主要港湾コンテナ貨物量



（出所）日本港湾協会 HP より　（2015 年の速報値）

（2）進むインフラ整備

スリランカは、1983 年から 2009 年まで、不幸な内戦がありました。ご存知の通り、アジアの各国は、80 年代から 90 年代前半にかけて、日本を始めとする先進国の進出による工業化を推進、経済発展を謳歌しました。残念ながらスリランカは、その流れからは取り残されてしまっ

た感があります（さる政府高官とお話した際、「その昔はシンガポールなどより遥かに経済的に大きな存在だった。内戦さえなければ、もっと存在感ある国になっていた」と嘆いていたのが印象に残っています）。アセアンや中国の主要都市と比較すると、道路や鉄道はじめ各種のインフラ整備は遅れていました。

ところがここにきて、急速にインフラ整備が進みつつあります。上記で述べました通り、国・地域としての重要度に目をつけた各国から、援助の手が差し伸べられてきていることが背景にあります。特に中国は、「一帯一路」政策の一環として、スリランカには巨額の援助をしており、空港から約 40 分程度で市内を結ぶ快適な高速道路が建設され、市内には巨大な電波塔が建設中、更に、スリランカの南側に港や空港も設置され、今後の発展が期待される一方、その巨大な援助がスリランカを苦しめることにも繋がっています（この点は後述します）。

日本も ODA による高速道路建設や空港拡張工事、地上デジタル導入等々のインフラプロジェクトがあり、ゼネコンや総合商社はじめ各社がビジネスを進めています。

空港と市内を結ぶ高速道路

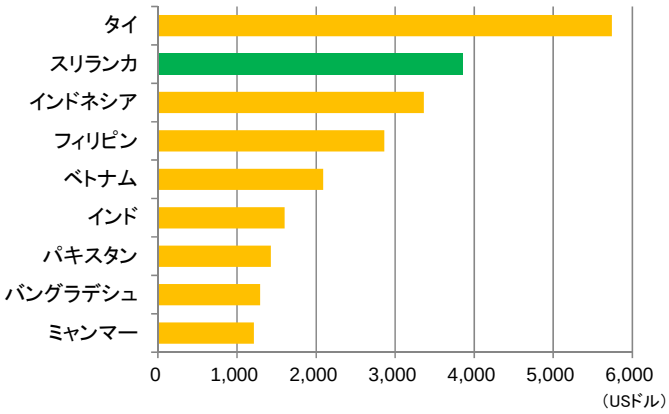
電波塔

（3）質の高い労働力と教育水準、治安

スリランカは、一人当たり GDP が 4000 ドル近くまで達し（インドの約 2 倍）、世銀の分類では「中進国」入りの基準に達しつつあり、教育も相応に高い水準にあります。識字率は 90%を超え、幼稚園から大学までの無償教育制度があります。主な現地語は 2 つ（シンハラ語とタミル語）ですが、双方を結び付ける言葉として英語を「連結語」としており、英語人材が豊富です。欧米企業がこれに目をつけ、IT とアウトソーシング業が盛んになりつつあり、特に ICT 関連に 8 万人以上が従事し、一大産業になりつつあります。

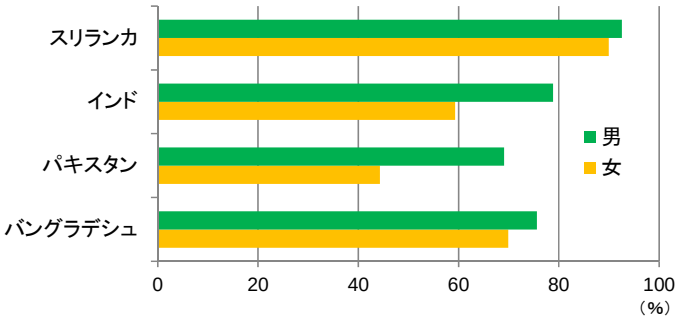
また、スリランカでは、労働組合の組成は法律上義務ではなく、組合を持たない企業も多く、隣国のインドなどと比較すると、労働争議で苦しんでいる日系企業はあまり見受けられませんでした。ただ、以前、社外の組合組織が入り込んで扇動し、争議を引き起こしたケースもあるため警戒は怠るべきではないと思います。

図表 3　アジア諸国の一人当たり GDP 比較



（出所）International Monetary Fund, World Economic Outlook Database, October 2016

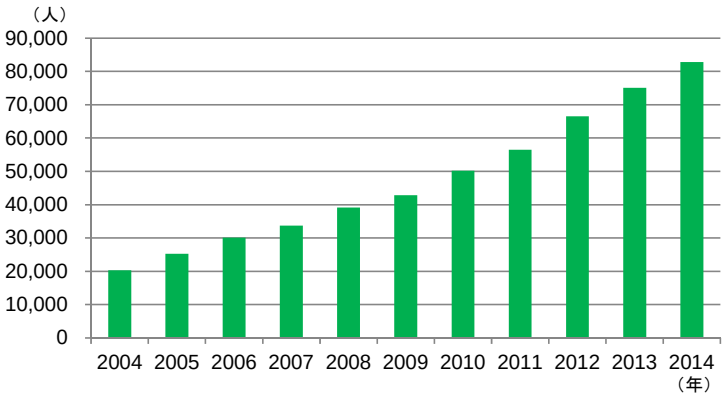
図表 4　南アジア諸国の成人識字率（2010～2016 年）



（出所）World Development Indicators

治安面では、内戦のイメージが強い国ではありますが、特にコロンボの市内では、特別な地域を除き、アセアン諸国と比較しても遜色ない治安状況だと思います。国民の大半は仏教徒で、若干の宗教対立はあるものの、近年、特に大きなテロが発生したケースはありません。オーストラリアのシンクタンク IEP が発表するランキング（グローバル・テロリズム・インデックス：指数が高いほどテロのリスクが高い）によるとスリランカは 68 位と、アジア周辺国と比較してかなり低いものとなっています。実感としても、通常に生活や観光をしている分には、身の危険を感じることはほとんどない印象です。

図表 5　情報通信技術（ICT）労働者の推移



（出所）ICTA, National ICT Workforce Survey 2013

図表 6　グローバル・テロリズム・インデックス

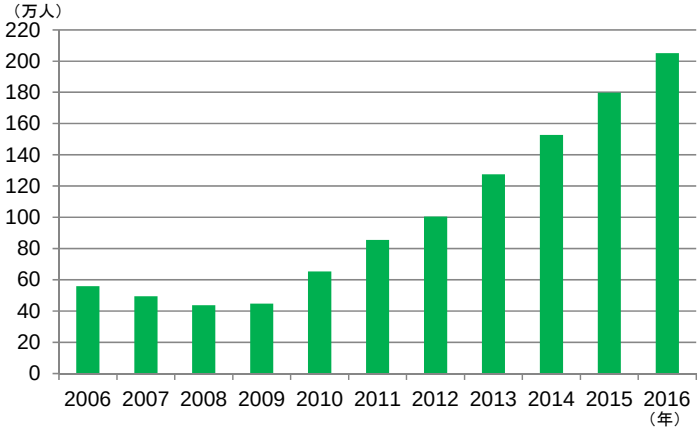
順位	国名	スコア
1	イラク	10
8	インド	7.543
9	トルコ	7.519
12	フィリピン	7.126
16	タイ	6.609
21	バングラデシュ	6.181
42	インドネシア	4.55
68	スリランカ	2.905
103	韓国	0.611

（出所）Institute for Economics and Peace, Global Terrorism Index 2017

（4）豊富な観光資源

スリランカは、もともと自然と仏教はじめとする文化が豊かな国でしたが、内戦の終結と治安の向上を背景に観光資源にも目が向けられており、観光客が急増しています。筆者も、見事な仏教遺跡や巨大な岩石の上に建設された王族の居住地跡を見た後、野生の象の大群に出会えるサファリツアーに参加し、楽しみました。また、女性を中心に「アーユルヴェーダ（インドの伝統医学）」を楽しまれる方も多いと聞きます。日本からの直行便もあり、最近は、日系企業によるホテル・リゾート開発なども増えつつあります。一方、ここまで豊かな観光資源があるにも関わらず、道路や宿泊施設などのインフラ整備が追いついておらず、もったいないなぁ、と感じることが多々あります。逆に言えば、観光業にとってはかなりのポテンシャルがある国ともいえると思います。

図表 7　スリランカへの外国人旅行者数の推移



（出所）World Development Indicators

シーギリアロック（世界遺産）

シーギリアロックの壁画

サファリツアーでの野生の象の群れ

2. 中国とインドと全方位外交と

（1）対中国

現在、最大都市コロンボはビルや大手ホテルの建設ラッシュですが、その大半は中国の建設会社が行っています（漢字で記載された工事の概要やビラが貼られています）。また、市内のホテルも中国人旅行者やビジネスマンで溢れ、空港では東洋人とみれば「ニーハオ」と声をかけられます。中国が、一帯一路推進の観点から、スリランカのインフラ整備に対し多額の援助をしていることで、中国のプレゼンスが大きくなっています。

一方、巨額の援助がスリランカを苦しめている一因ともなっています。特に、今話題となっているのが、「ハンバントタ港」です。スリランカ南部のハンバントタ港はもともと漁村だったところを、スリランカ前政権時代に中国の援助で港湾開発を進めました。ところが、借り入れた資金の返済に目途が立たず、2017 年末に 99 年間の港湾使用権を 11 億ドルで中国に売り渡さざるを得なくなりました。次は、「マッタラ・ラジャパクサ空港」がやり玉に挙がっています。同空港も、前政権が中国から 2 億ドル近い融資を受けて建設したものの、利用度は話にならないほど低く、これも中国が譲渡を迫っていると言われています。

こういった動きに隣国インドは神経を尖らせています。スリランカの港や空港を中国に軍事利用されれば、インドにとっては喉元に刃を突き付けられるようなものです。

大国の思惑を利用しつつ、見栄えの良い開発に走った結果、対外債務の拡大、自国資産の売り渡しや隣国との関係悪化にも繋がる現実が垣間見えます。

コロンボ市中央のホテル建設ラッシュの様子

（2）対インド、全方位へ

もともと隣国インドとは微妙な関係がありました。古くは、インドの古代叙事詩「ラーマーヤナ」で、主人公のラーマ王子の妃が誘拐され、連れてこられた島がスリランカと言われています。その昔のインドのヒンドゥー教徒からすると、スリランカは敵役が住む島、といったニュアンスがあったかもしれません。また、スリランカは 1983 年から 2009 年にかけて 26 年もの長い間内戦状態にあり、7 万人以上の犠牲者が出たと言われています。これは、もともとの現地人たるシンハラ人とインド南部を発祥とするタミル人の 2 大勢力の対立がもたらしたものであり、こういった歴史から、特にシンハラ人がインドを見る目は、時に微妙なものがあるように思います。

一方で、経済の方はインドと大きな繋がりがあります。インドとスリランカには FTA が結ばれています。インドースリランカ間の航空便は常に満席に近い状況であり、人の往来も活発です。スリランカの前政権は、中国に傾倒し、前述のような放漫な開発と対外債務の増加をもたらしましたが、現政権は「全方位外交」を掲げ、インドとも良好な関係を築こうとしています。インドも、モディ首相とスリランカのシリセナ大統領が互いに訪問しあい、インドからスリランカへの経済援助を表明するなど、関係改善を図ってきています。スリランカにとっては、中国一辺倒からの脱却、インドにとっても、インド洋での中国のプレゼンス拡大への危機感があり、両国の思惑は一致しています。

3. 日本との関係／想定外の親日さ？

（1）戦後賠償／スリランカ人にとっての日本人

今の日本人にとって、スリランカは遠い国との印象ですが、スリランカ人にとっての日本は極めて近い、身内に近いような印象を持っているのではと思います。実は、スリランカ人が日本人と会うと、必ず話題となる歴史上の出来事があります（スリランカに行かれるご予定のある方、これは現地での必須科目です！）。

第 2 次世界大戦が終結し、戦勝国によるサンフランシスコ講和会議が開催されましたが、戦勝国の一部から、「日本分割統治」を推す声が挙がっていました。これに対し、当時のスリランカ代表のジャヤワルダナ蔵相が日本の主権を擁護すべく、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によってのみ止む」とのブッダの言葉を引き、日本への賠償を放棄するとした演説を行い、これが多くの国の賛同を集め、日本の国際社会復帰に繋がったと言われています。その後、ジャヤワルダナ氏は大統領となり、逝去の際に、「右目はスリランカ人に、左目は日本人に」と遺言し、角膜を提供されております。また、スリランカの首都はジャヤワルダナ氏にちなんで、スリジャヤワルダナプラコッテと命名されています（コロンボは首都ではありません。これも日本のクイズ番組でよく出される問題ですね）。

筆者は、平成 26 年の安倍首相のスリランカ訪問の際の経済フォーラムに参加しましたが、安倍首相はじめ、日本人・スリランカ人問わず、登壇されたほとんどの方がこのエピソードを自分の経験・知見を交えて話をされていました。それほどスリランカ人にとっては大変誇りに思う出来事であり、日本人もそれに敬意を持って相対する必要があると思います。

（2）日系企業進出動向

三菱 UFJ 銀行コロンボ出張所が入るビル

上記のように、極めて親日的な国民性ですが、やはり日本製に対する信頼感も抜群です。コロンボ市内では、日本製の中古車が非常に多く、蕎麦屋の屋号が付いた軽トラックの横をトヨタの「プリウス」が軽快に走る、といった風景が広がります。

日系企業の進出数は 130 社程度（2017 年 7 月　出典：ジェトロ・コロンボ事務所）で、まだそれほど多くはないですが、前述の物流、観光業に加え、総合商社、造船、製造業と多岐にわたり、業歴も古い企業が多い印象です。特に、食器でよく知られるノリタケは海外の生産のほとんどをスリランカ工場に集約、造船の尾道造船は現地で上場した子会社を保有しています。手先が器用、勤勉といった国民性から、細かな作業を要する画筆の製造やガラスチェーンなどの軽工業が進出、また、1 人当たり GDP が相対的に高く、今後の経済成長にも着目し、三井住友海上火災保険が現地保険会社に出資するなど、金融業の進出も見られるようになりました。スリランカの人口は 2 千万人程度ですので、大きな内需は期待できないものの、南西アジアの需要を取り込むために、スリランカをマーケティングのテストケースとする日本企業もあります。前述の通り、日本人との親和性も高く、日本文化に大きな関心を寄せる国民性ですので、まずはスリランカでテストマーケティングをし、南西アジア全域に広げていこうという動きです。なお、三菱 UFJ 銀行も、2016 年 1 月に邦銀初の出張所を開設、現地の投資誘致機関の BOI（Board of Investment）や国営最大のセイロン銀行と提携し、現地の情報収集・情報提供に努めています。

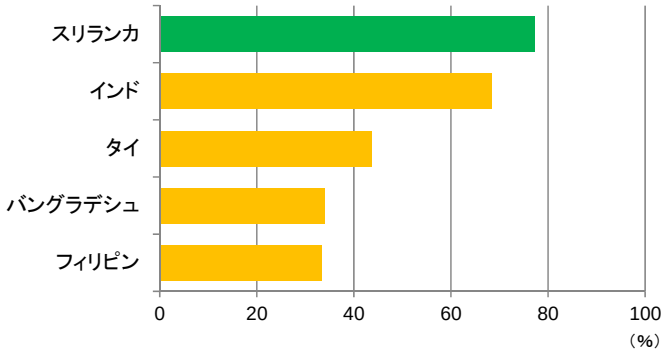
余談ですが、スリランカには千人を超える日本人駐在員がいますが、現地の生活を楽しまれている方が多い気がします（他の南西アジア諸国との比較で、ですが）。家族を帯同されている方も多く、日本人との親和性や治安の良さがこんなところにも表れているように思います。

4. さて、これからが…

スリランカには、その地政学上の優位性が各国からの援助を引き出し、親日的、治安も良いという、強い「光」の部分と、同じく地政学上の優位性があるがために大国の思惑に翻弄され、結果として対外債務や財政赤字が増大するという「影」も色濃くあります。対外債務と財政赤字は危険水域に近づきつつあり、IMF からも歳入増加による財政基盤の改善を強く求められています。このような背景には、内戦から国際復帰して間がなく、しっかりした官僚制度が整備されておらず、人材の育成もまだその途上であり、バランスがとれた国家運営が難しい、という現実があると思います。

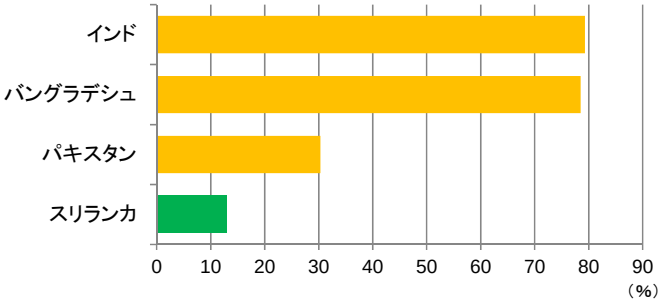
スリランカにあてられる「光」をいかに利用し、そこから生まれる「影」をいかにコントロールしていくか、非常に難しい国家運営を迫られています。ただ、「光」が強いだけに、これをうまく利用できれば、遅かった国際社会デビューのビハインドを跳ね返すポテンシャルも十分あると感じます。

図表 8　公的債務の対 GDP 比率



（出所）International Monetary Fund, World Economic Outlook Database, October 2016

図表 9　南アジア諸国の外貨準備／対外債務比率



（出所）World Bank, International Debt Statistics 2016

5. おわりに

スリランカについて、ざっと簡単にではありますが、ご説明させていただきました。スリランカの強い魅力（光）と課題（影）、いかがお感じになられたでしょうか？

少し前に「セレンティピティ」という言葉が流行りました。これは「偶然の素敵な出会い」「何かを探している時に、探しているものとは別の価値あるものに偶然出会う」といった意味ですが、この語源はスリランカの王子の寓話「セレンディップ（＝スリランカ）の 3 人の王子」がもとになっています。本稿に目を止めていただいた皆さまにとり、今まで全くスコープにも入っていなかったスリランカという存在に改めて気づいていただけたのであれば、幸いです。

（写真撮影：すべて筆者）

筆者略歴
昭和 63 年 4 月　東京銀行（現 三菱 UFJ 銀行）入行。平成 15 年 5 月　ジャカルタ支店、平成 22 年 6 月　ホーチミン支店副支店長を経て、平成 26 年 6 月　チェナイ支店支店長（平成 28 年 1 月　コロンボ出張所開設に伴い、コロンボ出張所長兼務）。平成 29 年 12 月　より現職